

昭和五十三年十月二十三日 講演

「これからの社会の求める人間」

株式会社東京12チャンネル社長 中川順先生

光栄に思っております。

ただいまご紹介に預かりました中川です。今日は和敬塾で皆様方にお話をしようと言っていますが、お伺いしたわけでございますが、この和敬塾は皆様方は既にご経験なさっておりますように、前川さんがお創りになった立派な塾でございます、ここで人材を養成しておられるわけで、ここに入って生活しておられる皆様方は、幸福だと思います。

実はプライベートのことで恐縮ですが、私はすぐ近くに住んでおりまして、近くには田中角栄元総理も居られます。娘も日本女子大を出ているわけで、実は和敬塾に女性の学生が居るかどうか聞いて来なかったのですが、入ってくるなり真つ黒な黒一色で、非常に厳しさを感じているわけでございます。もう少し色気があったほうがよいのではないかと思えます。これは冗談でして、後で問題を起こすといけませんから……。

いずれにしても、この立派な和敬塾で話をさせて頂けることは、私卒直にいつて非常に

私の過去三十余年の経済界での体験を交え、今修学中のみなさんに、社会へ出る心構えについてお話をしたい

私、実は経歴にどう書いてあるか知りませんが、学校を出まして、財閥会社に三年ほど居った訳です。そこを、これも別に喧嘩して辞めたわけではないのですが、円満退社して途中で転向いたしましたして新聞記者になり、日本経済新聞社に入社し、ちょうど三年前に東京12チャンネルというテレビ会社の社長になったわけです。東京12チャンネルというのは日本経済新聞社が昭和四十四年に経営参加しまして、それが経営の中心になっているのであります。まあ、いわゆる日経の系列といってもよろしいでしょうね。それで今はテレビ会社の社長をやっているわけでありまして。

私は日本経済新聞社に三十年居りまして、その間ずうつと経済記者でとおして来たわけで、

新聞社時代にはいろいろな所へ行って話をする機会があったのですが、これからの景気はどうかとか、そういういわゆる経済講演会が総べてであったわけです。今日皆様方にお話するのは経済の話ではなくて、修身のような話をさせられるわけで、これは自分としても偉そうなことを喋らなければならないから非常に照れ臭いわけです。しかし敢てこの壇上から私が経験している、一体これからの社会というものはどういう人間を要求しておるのかということとを、私の経験を交えてお話してみたい。ただしお断わりしておきますけれども、私自身が今から喋るような立派な人間ではございませんで、私がいろいろな所で経験したことを例にしまして、こういう人間でなければならぬのではないかということをお話しておきたいのです。

皆様方は各々大学で勉強しておられる方でございますから、いずれは大学を出て行かなければならない。或いは来年お出になる方もある

かも知れません。いずれにしましても何時かは社会に出て行かなければならないわけでございます。現に十一月からは来年の各会社の入社試験があるわけで、既に会社訪問をやっておられる方もあることと思います。いずれにしましても永久に学生で居るわけにはいかなく、社会に出て行かなければならないのですが、これからの社会というのはどういう人間を要求しているのかということを上上げてみたいと思いますのであります。

二十一世紀に生きる諸君は世界の中の日本人として通用する人間でなければならぬ——日本人が国際的に通用するための二つの条件

皆さんは殆んど全部の方が二十一世紀の世界を生きて行く方でありませう。私も二十世紀まではまだ随分あるわけですから、もうその頃は社会に居ないと思うのですが、皆様方は二十一世紀のその中心人物として活躍する人だと思ひますし、また活躍してもらわなければ困るのであります。そういう時代に皆さんは入って行くわけでございませう。

ご存じのとおり日本の国は戦後非常に大きくなりまして、国力が一番端的に表われるのは何かと申しますと、これは国際的に評価される尺度といひますか、結局つきつめますと、今よ

く円高とかいわれておりますが、いわゆる為替相場ですね、これが日本の相場ということですから、その為替相場がたまたま今日一ドル百八十一円、これは今までの高値を更新したわけですから、今までの一番高い値段が今日出たわけですから、この円高問題というのがいろいろの問題を起しておけることは、皆さんご存じのとおりです。しかしいろいろの問題はあるけれども、この百八十一円というのが、かつて昭和二十五年に一ドル三百六十円という相場が決定されましたが、それが今日の百八十一円ということになりますと、為替相場がちょうど二倍に上がったのです。それだけの円の値打ちが上がったということなんです。つまり簡単にいいますと、日本の国力というものが二倍になったといつてよろしいかと思ひます。

従いましてこの日本はこれから国際的に世界の中で生きて行くわけでありませうから、日本のことだけを考へておればよいのではなくて、世界の中の一員として伍して行かなければならない、その中の日本を背負つて立つ皆さん方でありませう。そういうことを考へますと、一言でいへば、これからの人間は国際人でなければならぬ。国際的に通用する人間でなければならぬと思ひます。井戸の中の蛙では困るんです。国の中だけで威張つていて外に出たら通用しないという人間では、これからの日本の国

は発展しない。国際人でなければならぬ。国際的に通用する人間でなければならぬ。これはもう誰が考へてもそうなるだろうと思ひます。

それでは国際人とは何か、どうすれば国際人になれるのかという質問があると思ひますが、その条件といひますか、どうしたら国際人になれるかということについてはいろいろあると思ひますけれども、私なりに考へますと、二つあると思ひます。

一 新国際時代に対応して実際に役立つ

語学力を身につけること

ちようどこに芥川龍之介全集というのがあります。皆さん芥川龍之介をお読みになったかどうか知りませんが、私は学生時代に非常に傾倒して、芥川の小説はもとより書簡から随筆に至るまで全部読んで、未だに暇があれば読んでおります。皆さんは芥川に対して、どのようにお考へか知りませんが、私は芥川に非常に傾倒しており、たまたま昨日の日曜日にも見ておりましたら、当時の中学生、今でいへば高校生です、それが小説家——当時は文芸家といったのですが、小説家になるにはどうすればよいのですかと芥川龍之介に質問したわけですね。すると芥川龍之介は、まあ表現は省略しますが、けれども、将来文芸家になろうとする人間は、先

ず須らく数学を勉強しなさい。それから二番目には文芸家になろうとする中学生は須らく体操をやりなさい。三番目は文芸家になろうとする中学生は須らく国語とか作文これを勉強しないで欲しいと言った。つまり芥川龍之介という人は逆説が非常に得意で、逆に言ったわけですね。この意味がお分かりになるかどうか、彼の言わんとするところは、将来小説家になろうとする人間は、自分は数学が出来ない、数学が苦手で、数字を見ると頭が痛くなる、或は身体が丈夫でなくて、体操なんか全然出来ない、スポーツは出来ない、だから自分は文学者になりたいんだ、こういう人ばかりが文学者になりたがる。それでは困るんだ。文学者になるには数学をこなし得る頭脳の力を持つていなければならぬ、それから又徹夜で仕事ができるような体力を持つていなければならぬ、それから国語とか作文は勉強しなくても分かるような才能を持つていなければならぬ、ということ

を言おうとしているわけで、私はこれを見るたびに非常に感心させられるわけです。そこでこれを真似ていいますと、将来国際人として活躍しようという者は、普通なら先ず語学を勉強せよ、それから二番目には外国のことをよく勉強しなさいと言いますね。私はこれを逆にここで申し上げたいと思います。先ず外国のことを勉強する前に、日本のことを勉強しな

さい、と申し上げたい。皆さんほどの程度に英語が喋れるか知りませんが、日本の英語教育は、私たちが戦後十何年間ずうつと教えられてきました。が、会話一つできないというのが、日本の英語教育であったのであります。皆さん方はどうか知りませんが、過去にはそうであったのであります。

その英語教育のやり方が間違っていた。シェイクスピアだとか、そういう古典文学に通じている英文学者が会話一つ出来ないという例はいくらでもあります。シェイクスピアのよ

うな難解な古典文学は解説しても、日常会話が出来ない英文学者は日本にはザラに居るわけです。これはおかしいと思うのです。これは英語の教育のやり方が間違っている。だからそういうような教育、つまり文法であるとか、そういうことばかりやってきた。或いは皆さん方を毒してきた受験勉強、何の役にも立たないあの英語試験問題、ああいうものを勉強しても一つも実力にならない。また一つも喋れるようにならないと私は思います。だから私はあのよう

な勉強はするなと言う。これはもつとも最近では外国人がたくさん日本へ来ている、或いは皆さんも外国へ行く機会があるだろうから、自らぶち当たって英語を修得する。最近では英語だけでは通用しない。少なくとも英語の他にフランス語ぐらいはマスター出来る知識をもつ必要が

ある。国際会議等は殆どフランス語ですから、英語では通用しない。そういうようなことを皆さん方は学校の時に身につけてもらいたいと思います。ですから、いわゆる語学の勉強はするな、そうでなくて、新しい時代に対応するような勉強の仕方をしなさいと私は言いたいわけです。

二 日本そのものの知識、その基礎的な

知識・文化・歴史等を身につけること

それから日本のことを勉強しなさいというのは、英語が喋れても、日本のことを知らなければ説明が出来ないわけですね。私はかつてアメリカで暮しておったことがあるのですが、アメリカ人が聞くことは「日本で一番大きな鉄鋼会社は何処ですか」とか、「富士山は何メートルですか」とか、そういう種類の質問が非常に多いわけで、「それは知りません」と言うわけには行きません。「いやあ、それはいくらでしたか忘れました」というわけにも行かない。そういう基礎的な知識・文化・歴史、こういうものの知識が要求されるわけです。いくら英語が喋れても、法隆寺は何時頃出来たんですかと聞かれて、「さあ、あれは何時でしたかねえ」では、説明が出来ないわけです。

皆さん方に、私がここで一つ質問をいたしますから、お答えが出来るかどうか。「日本は今

外国と貿易をしておりますが、一番多く物を売っている国はどこでしょうか「これは分かるでしょうね。これはもちろんアメリカです。「では二番目はどこでしょうか」これは普通私どもが平常付き合っている人に聞いてみても、「さあ、二番目はどこでしたかね、フランスですかね、イギリスですかね」というようなお答えが返ってくるのです。二番目は韓国です。皆さん、おっつというお声が出ているので、知らなかったのではないかと思うのですが、そういう程度の知識ですね。それでは、「日本のナンバーワンの輸出品目は何でしょうか」。これはどうでしょうか、日本の輸出が増えて困っているという話があるのですが、「何が一番輸出のトップでしょうか」。これは自動車なんです。二番目は鉄鋼、三番目は船舶ということになっているのですが、そういう全く簡単な知識でもわかっていない。

だから国際人としてやって行くためには、外国のことを勉強するよりも、日本のことを先ず勉強しなさいと私は言いたい。よく外国へ行った人が、外国の立派な鉄鋼会社、或いは自動車会社等を見ると「やあ、素晴らしい」と腰を抜かすんです。ところが日本ではそれよりもはるかに進んでいる会社はいくらでもあるんです。鉄鋼設備等は日本が世界一なんです。それを見ないで、外国へ行つてつまらない鉄鋼会社を見

て来て、素晴らしいなどと言っておるのが、一ぱい居るんです。日本のことを知らなさ過ぎる。

そういう近代的な産業経済においてもそのとおりであるが、まして日本の古い歴史であるとか、美術とか、芸術になりますと、もうちんぷんかんぷんです。外国人に「これ、何ですか」と聞かれても、説明ができない。五、六年前のことですが、代々木の明治神宮へお正月にたくさんの方がお参りしますが、或る人が「この明治神宮というのは、一体どなたを祀っているんだったかね」と言ったところ、隣の奴が「それは嵐寛だよ」と言ったのです。分かりますか、嵐寛寿郎という俳優が明治天皇という役をやったんですね。「荒寛を祀つてあるんではないか」と言ったら「ああ、そうか」と言ったのです。まあ、これは極端な例ですけれども、それに近い知識というものを、私を含めてお互いに日本のことを知らなさすぎる。日本のことをよく勉強しなければならぬ。これは何時やるかといえば、学生時代以外にないので、皆さんも学生時代にぜひ身につけていただきたい。この二つが今後国際人としてやって行くための基礎になると思うのです。

仕事には如何なる意気で当たるべきか、

社会は如何なる人間を求めているか――

五つの眼目

前置きが長くなりましたけれども、そういう国際人というのが、今後要求される原点だろーと思えます。そうして社会へ出る、社会へ出ますと仕事をしなければならぬ。学生の時のように遊んでばかりいられない。遊んでいるといえば、非常に失礼ですけども、社会というものは学生の時のようにのんびりしたものではない。また、そうしたものであつてはいけない。私はここで修身のようなお話を申して恐縮ですけれども、これからの社会の求める人物というのは、基本的には国際人というのが求められますが、もう少し身近に具体的に申しあげますと、皆さんはどういう仕事であれ、仕事にお就きになる。仕事をやって行くわけですが、その場合にどういう気持ちでやつて行かなければならないか。また社会はどういう人間を要求しているかということをおしあげておきたい。それは五つあります。

第一 仕事は男の総てである

先ず第一に、仕事というものは、男にとつて総てであるということです。女性でも仕事をする人もありますが、皆さんは男性ですから、先ずこれを頭に叩き込んでおいてもらいたい。仕事は遊びではない。このことは非常に大事なことである、と私は思います。だから生き甲斐のある仕事を自分で選んで、一生涯自分の仕事と

して身体を張ってもらいたい。また張らなければいけないと思うのです。毎年の例ですけれども、会社へ入ってきて二、三か月経つと、ノイローゼになるのが非常に増える。最近は何も括って死ぬのがよく新聞に出ていますね。ああいう人はこれからの長丁場をやつて行く資格がない。何時かは落伍するんです。やはり逞しさというのが必要で、その仕事に真正面からぶち当たって行くという気魄と、その仕事に生き甲斐を感じることが必要なんです。どんなに仕事で苦労しても、どんなに仕事をやり過ぎても、仕事で病気になるということは絶対になりません。ノイローゼになるのは何故かといいますと、嫌々やるからです。或いはつまらぬ問題で悩むからです。人間は悩むと、非常に疲労しますし、消耗しますけれども、自分のしたいことをしている時は、疲れもしなければ病気になることもない。嫌々やったり、心が弛んでいると、病気になるわけです。

従つて仕事を自分の一生涯のものとして取り組む以上は、自分に或る程度の犠牲はやむを得ない。仕事を理解して行かなければなりませんから、世間的なマイホーム的な考え方は捨てなければならぬ。二、三年前でしたか、将来の夢は何かという質問に、将来は芝生のある庭で綺麗な奥さんと暮らすのが夢だ、とかいうのが出ておりましたが、そういうことでは、日本

の国を背負つて行くとか何とかいうことは出来ないと思えますね。それは奥さまも大事ですけれども、男で一番大事なものは仕事なんです。夜六時か七時になって旦那が帰つて来ないと、「うちの主人は愛情がない」とか何とか言つてよく奥さんがこぼすのですが、第一、六時や七時に帰つて来るような者には碌な者は居ないわけです。もつとも外でマージャンをやっているのも碌な者ではないけれども、仕事で遅くなることはいくらでもあることで、また正しい付き合いというものには必要だし、残業もあります。

今皆さんはご存知かどうか知らないけれども、貿易商社丸紅とか三菱商事とかいう貿易商社の人たちは、非常によく働いております。夜でも十時までは必ず残業をしなければならぬ。というのは、外国相手で時差関係がひっくり返つておりますから、向こうの昼がこちらの夜です。そこへテレックスや何かが入つてくる、それを受けなければならぬ。そのために家へ帰るのは十時、十一時で、マージャンなどやる暇がないというような生活が非常に多いわけです。それは何も商社だけでなく、他の所も同じです。とにかく六時になつたら家へ帰るなどという考え方を若しあなた方がお持ちでしたら、それは捨てなければいけない。仕事というものには非常に厳しいものだと、前も

つて覚悟しておかれたほうがよいと思えます。皆さん方は今学生で勉強されておるので、これは人生のうちで一番極楽の時です。しかも和敬塾のようなよい所へ入つて、毎日快適な条件で生活し勉強しているということは、これは最高ではないかと思えます。こういう時代は、大学を出たら、もうないということです。だから学生時代の苦労というようなものは、苦労のうちに入らない。試験がどうのといったところで、そんなものは大したことはない。出来なければ、自分だけの問題ですからね。そういう試験も、今はそんなに難しいものは無いのではないのでしょうか。〇×式とかで、どこか打てば当たるというのが大体ですから、まあそういうことで、仕事というものは学生生活のような甘つちよろいものではない。非常に厳しいものである。そして男にとつて仕事は総てである。その仕事に取り組んで行くことが大事なんだ。そういう人を社会は要求しているのであります。

皆さんは昨日の日曜日に大半の人はヤクルトの試合を見たと思ふんです。球場へ行くかテレビで見るか、何らかの関心があつたものと思えます。私もあの試合をテレビで見たりもしたけれども、私は今度のヤクルトの優勝はいるあると思つけれども、やはり厳しい練習というものが、ヤクルトの優勝の基本だろうと思ふんです。私は広岡野球というものの、広岡(達

朗)さんという人物を個人的に知りませんが、なかなか立派な教育をして、今までのプロ野球選手の墮落を根本から建て直した。試合中は酒を呑むな、試合の直前には飯を食うな、とかいうことまでやってきたということですね。皆さん方は馬鹿馬鹿しいと思うかも知れませんが、やはりそれが優勝の原動力になったと受けとめているわけで、私は偉いと思う。やはり驕る者は久しからず、ジャイアンツなどは、これはよい例ですね。がたがきているわけですね。それから西鉄などは身売りをしなければならぬ、昔のライオンズですね。僕らの時は西鉄であつたけれども、今はクラウンですか、あれは結局西武に身売りしたわけです。やはり墮落したからです。勝負の世界は厳しいということです。やっている連中は決して野球が楽しいと思つてはやっていないと思うんです。やはり厳しい社会に居るんだ。それだけにやはり正に全力投球でやっているわけで、それが優勝したという事は、私は偶然ではないと、このように受け止めているわけです。

私が時々機会があつて行く赤坂に有名な料亭があるのですが、その料亭にはお客さんが非常に多いので、下足番が居る。下足番というのは、靴を脱いだ時に、番号札を渡して整理して行く人ですね。それはお爺さんです。毎日宴会等で百人から二百人を越える靴が並ぶわけで

す。ところが、その料亭のお爺さんは、札をくれないんです。例えば、僕が靴を脱いで札を貰おうと待っていると、札はいりませんと、全部覚えてしまうわけです。宴会が終わつてお客さんが出てくると、その人の靴を、僕なら僕の靴をさつと出す。全く間違わないで、全部頭の中へ入っているのです。どうしてその靴が分かるのかと聞いたことがあるのです。相当年輩の七十近いお爺さんですが、元気な人ではありませんけれども、その靴が顔に見えるんだそうです。だからあの方の顔がこの靴だと一遍に一致するんだそうです。これは長年、それこそ下足番で一生暮らしてきたわけです。五十年くらい下足番をやつておるわけで、そうすると靴と顔が結びつく。靴をみて、あの方の靴だということで、その靴を出す。私はその話を聞いて非常に感心したんです。やはり仕事、この人の仕事は下足番が仕事なので、そういう仕事を五十年間やってきて、札など出さないうでさつと靴が出せる。私はこれは立派だと思ふ。そういうふうな、仕事というものを自分のものにして、仕事が出来た。俺はしががない下足番よと思つていたら、何時までたつても靴と顔が結びつかない。違った靴など出したりするようになりますから、私はそういう意味で、仕事が総てだということをお爺さんに先ず申し上げておきたい。

第二 仕事は自分で選べ

それから二番目には、仕事というものは自分で選べ、ということですね。例えば、自分が銀行員になりたい、バンカーになって自分が活躍したいと思つたら、自分で銀行を選んだらよい。私は最近非常に奇異に感じていることは、学生諸君が人気のある会社というものをリクルート・センターか何かが発表しておりまして、これが二、三年来常にトップになっているのが、東京海上火災という会社ですね。皆さん方はどこを指向しているのか知りませんが、かつては日本航空が一番になったこともあるようですが、最近はずつと東京海上火災、どうしてそこを選ぶのか理由が分からない。私は東京海上火災を選ぶ人があつたら、東京海上火災で何をしようとするのかと聞きたい。東京海上火災の大使をやろうとするのか、或いは営業をやろうとするのか、或いはそこで経理をやろうとするのか、東京海上で何をやろうとするのか、海上保険の世界に雄飛する保険の業務をやり、そして世界一のセールスマンになりたいと思つて東京海上を受けるなら、私は脱帽するわけです。しかし恐らく東京海上を受けるのは、その会社が安定しているからだだけだと私は思うのです。あの会社は、どうも潰れそうにない。あの会社に入つておれば、定年まで居られるだろうというの、大半の人の考えではないかと思

う。私はそういう会社の選び方はやめ給えと言いたい。少なくとも大学を出て、これから一生の仕事を探す場合に、あの会社は安定しているから東京海上火災へ行こうかということなら、絶対に将来性がない。

私はやはり仕事と、もう一つは自分の一生の伴侶となる妻、これは自分で選び給えということです。自分の女房まで人に選んでもらう必要はない。何故私がそういうことをいうかといいますと、自分で選んだものは最後まで自分で責任を持たなければならない、という気持ちが出るからであります。とにかく仕事も結婚も一生の仕事ですね。だからこの二つだけは、自分で選びなさいということです。たまたま見合い結婚で選んだ人を貶すわけではないけれども、見合いだって結構ですが、出来るならば自分の女房と自分の仕事くらいは、自由で選んだらどうか。東京海上火災なんていうものは、がんとしているからよいという程度の考えではなく、俺は何をやるべきか。よく三菱へ行きたいと言います。私も三菱へ入っていたので、あまり大きなことはいえませんが、その三菱へ行きたいという。私が行った当時は状況が変わっておりまして、私は学徒動員で戦争にもって行かれたわけです。どうせ生きては帰れないと思っておりましたから、まあ天下の三菱を受けて親が喜びますから、親孝行の意味で三菱へ入りました。

事実、母親は非常に喜んでくれました。これによい所からお嫁さんが来ると、当時は何もなかったけれども赤飯などこしらえてくれました。私は母親の気持ちに分らないわけではありませんが、当時三菱へ入って何をやるということまででは決めていなかった。どうせ自分は戦争に行く身だからという気持ちがありましたから。しかし今は戦争がなく、兵役もないわけですから、皆さん方は会社を選ぶ、職業を選ぶということとは、自分でやりたいものを選んでいただきたいと思えます。

私は自分のことをここで言い難いのですけれども、事実ですから申し上げますが、私は三菱へ行つて、どうせ戦争に行く心算でおったわけですが、ちょうど卒業の時に肋膜炎という病気になるしまして、兵隊検査が受けられなくなりました。そして病院から兵隊検査を受けたのですが、もちろん不合格になったわけです。当時は翌年廻しという制度がありましたので、今年病気の者は来年もう一度受けろということで、そして翌年検査を受けたのですが、肋膜炎ですからあとの影があるということで、当時としては丙種になりました。お前は病気がまだ治っていないから銃後で働けということ、私は兵隊には行かなかった。そしてやむなく三菱へ入って仕事をおったのですが、私は大学の頃から新聞関係、文芸関係、ジャーナリズム関係に非常に興味があ

りまして、会社へ入ったけれどもどうもピンと来ない、そこで新聞記者になりたいと思っておったわけです。

ちょうど当時は戦争中ですから、煙草なども配給でして、並んで買うと一個買える。大きな煙草屋へ行くと、二廻りできて二個買えるわけです。或る日曜日に、当時中学生であった弟を連れて煙草屋へ並んでおりました。もちろん弟は吸うわけではありませんが、二人で並ぶと四個買える。何時間も並んでいたんですが、暇でしようがない。当時会社では、日本経済新聞を読まされていたんですが、日曜日で会社へ行かないものですから、駅で弟に買って来させて、三時間くらい並んで居る間に、隅から全部読んだ。そして最後に下の方に小さな活字で日本経済新聞社が新聞記者を求む、という広告が出ていた。条件としては何歳までの者で、大学の経済学部を出た者で、通勤が一時間以内という記事でした。私はこれを見て、これだとむらむらしまして、これがやはり私の仕事だと思つた。私は煙草を買つて家へ帰り、親父がおりましたから、親父は海軍の退役軍人だったので家に居たわけですが、親父に「これを受けていいか」と聞きましたら、「お前の好きなようにやったらよいだろう」ということで、密かに日経へ願書を出したんです。もちろん、母親に言いますと絶対に賛成してくれませんが、黙って親父

だけに言つて受けたわけです。ところが幸か不幸か、あの当時三百人くらい受けたんですが、けつきよく四人入ったんです。今同期の奴が四人居るわけです。とにかく合格になったわけです。ところが会社には何も言つてないし、母親にも話してないのに、四月一日から入社しろと言ふことで、それから会社の上役のところへ行つて、三菱でも大変お世話になりましたけれども、こういうわけで新聞記者になりたいので、辞めさせて頂きたいということをお願いして、これは何とか了承を取りつきましたが、一番でこづつたのは母親で、新聞記者のようなやくざな仕事は絶対してくれるなと、やくざといわれた時は僕も面喰いしましたが、まあ当時は新聞記者は或る程度やくざといわれておりました時代でした。とにかく僕は一生懸命やりますから、そして絶対成功してみせますからと、母親の前で土下座といいますか両手をついて許してくれと頼んだのですが、母親は涙を流して最後まで許すとは言つてくれませんでした。まあ親父は黙つて息子のよいようにやらしたらよいではないかということ、それでまあ新聞社へ転向したわけです。

そして新聞記者になりましたが、今振り返つて、三菱は別に喧嘩して辞めたわけではなく、同僚も居りまして時々遊びに行つたりして非常に親しみを感じておりますが、私は新聞記者になつてよかつたと思つております。最初の時は天下の三菱へ入りたいという漠然とした気持ちであつたが、それを捨てて新聞記者になつて三十年間やつたことは、自分では楽しかつたし、よかつたなあと思つて、振り返つてみて自分の職業の選択は誤つていなかったと思つております。だから皆さん方は、自分の職業だけは漫然として選ぶな。自分が何かになりたいと思つたら、それを是非求めて社会に出て行つてもらいたい。人が行くから俺も行くというのではなくて、東京海上が安定しているからということではなくて、自分の職業は自分で選べということを第二として申し上げておきたいと思つます。

第三 人に頼るな

三番目は人に頼るなということですが、私はよく後輩から相談をうけるのですが、仮に三井物産を受けたい。どうして物産を受けるのかというと、あそこには先輩が居るからと言ふんですね。私は逆に先輩が居る会社へは行くな、と言ふんです。これも逆説ですが、つまり先輩が居る所では、そういうのに頭が上がりなくて仕事ができ辛いぞ、誰しも居ない所へ行つて自分で開拓するくらいの気魄を持ってと言つて、先輩の居る所へは行くな、とむしろ言つているのです。人間は困つた時はどうしても先輩のところへ行つて、どうしたらよいでしょうかと相談をしがちです。そういう依頼心というものを克服しなければいけない。皆さん方はどうか知りませんが、この頃大学の入学試験までお母さんがついて来るということですね。昔のことを思えば、そういうことは考えられないことです。またこの頃は、会社の入社試験にまで親が来るということ、一体これはどういうことだと言いたい。いや全部がそうだということではなくて、来る者もいるということですが。こういう青年に将来を託するという気持ちは、われわれとしては起りませんね。もうよい年をして、親が来なければ答案も書けないようでは、全く将来性がない。そういうのでは困る。人に頼らないこと、つまり独立心を養成して頂きたいと思つます。

これも自分のことで恐縮ですが、事実なので申しあげますが私が、三菱電機を受けた時は、一つの理由があつたんです。先ほど漠然と三菱を受けたと申しましたが、私は慶応義塾大学出ですが、三菱には、毎年慶応からは一人しか採らない、東大から三人とか、早稲田から何人とか、割当てというか、数が決まつているわけですから。実は慶応から一人だということで、それでは受けてやろうと変な意地が出まして、受けたのが一つの積極的な理由で、ただ漫然と受けたわけではなかつたのであります。それから日経を受けた。日経というところは、今は違いますが

が、当時は早稲田が九割でした。大体、早稲田大学はジャーナリズムが多いところですね。この和敬塾も早稲田大学の人が多いそうですが、早稲田大学というのは非常に有名な大学ですから、優秀な人材も非常に多いわけですね。いずれにしても僕はそこまで調べていなかったのですが、日経に入ったら早稲田が九割、慶応の先輩というのは庶務か何かやっているの一人きりで、新聞記者としては一人もいないんです。これはしまった、と思ったが後の祭り、とにかく私は戦後日経へ入った慶応の第一号なんですから、頼る先輩はいない。上の人には早稲田とか、一部には東大の人が居た。だから学閥というのは、その後早稲田も入り、慶応も入り、一橋も入るといふうに大体バランスがとれてはおりますが、私の時は日経には慶応はいなかった。結局、社会に出て頼りになるのは自分だけしかないということなんです。困ったらあそこへ行けばよい。しかしその人が自分の身代わりになって助けてくれるわけではない。最後は自分だけなんです。だからそれに堪え得る訓練と気魄が必要であると、私は自分の体験に鑑みて思うのであります。それで舐るように可愛がる先輩がよいのではなくて、突き放されることも大事です。

新聞記者で一番仕事を覚えさせるのが早いのは、例えば、総理官邸を担当する記者になっ

たとすると、その時はキャップというのがいて最初は引き廻してくれる。いろいろな大臣なんかを紹介してくれるたり、いろいろと取材の方法を教えてくれるわけです。いわば姉さん芸者ですね。われわれは入ったら、半玉ですよ。そして姉さん芸者が引き廻してくれるんですが、これを何時までもやっている、何時までたつても半玉は一人前にならない。お座敷で芸が踊れない。一番早いのは二、三回廻ったら、お前一人で行って来いと突っ放すのですね。突っ放して這い上がって来る奴はものになるが、そこへこたれてノイローゼになる奴は、いざれ遅かれ早かれノイローゼになる奴です。新聞記者になる者でノイローゼになるのは随分多い。もう人に会うのが恐くなる。これは本当の話ですが、或る大臣の家へ夜行けといわれて、しようがないから行って呼び鈴を鳴らしたわけです。すると大きな邸宅ですから、次々と電気がついて来た。来たなと思ったら恐くなって、一目散に逃げ出したという例はいくらでもある。それがたび重なる、また明日行かされる。しかも新聞記者の仕事というものは、今晩考えて、また明日考えるという仕事ではなくて、もう即決ですからね。今日行かないと駄目なんです。一晩考えさせてくれなどというようなことは、新聞記者にはないんです。今行くんだといえ、それまでなんです。だから何時までも姉さん芸

者がついて行ってやるといふことは、何時までも頼って駄目なんです。これは突っ放すのが一番よいのです。これは結局人に頼るなという例なんです。だから、自分だけしか信じられないんだという心構えを、基本的に持つていなければなりません。もちろん先輩の意見を聞くことも必要です。それに総て頼ってはいけません。結局頼れるのは自分なんだという気概を持つていただきたい。

第四 生意気になるな

それから四番目は、これは大事なことです、生意気になるなということ。社会に入ると新聞記者でも何でもやっている、仕事がある程度分かってくる。分かってくると、生意気になるんです。これは絶対に伸びませんから。生意気な奴は、仕事が少々分かった程度で一人前の顔をして知ったか振りをする。そして仕事をさぼる。いわゆる横着になる。こういうふうに生意気になった奴は、今まで私の経験では、絶対に伸びた試しがないですね。私は今テレビ会社に勤めているので、いろんなタレントの男性とも女性とも接触する機会が多いのですが、タレントで生意気になった奴は、絶対に潰れていくということ。歌謡曲を歌っている小唄臭いのがいますね。彼なんか譜も読めなくて、ただ節廻しで歌っているだけなんです。しかし

テレビという魔物で、天下に風靡するわけです。そしたら自分が非常に偉くなったように思う。それで今まで先輩でいた、例えば、美空ひばりが先輩でいたとしますと、それが楽屋にいても鼻にもかけないですよ。フーンと鼻であしらったり、頭も下げない。こういうタレント、名前は特に伏せませうけれど、一ぱい居るんです。ここで付け人といって自分の身の廻りの世話をする人間がいて、仮に今売り出しのA子というタレント、非常に評判がよいというのが飯を食っている、そこに醬油瓶があっても自分で取るうとしない。付け人に取れというんです。それで付け人がこれを取って刺身か何かにかけてやる。自分が非常に偉いように思つて部下をこき使うケースが非常に多い。これは楽屋でよくわかるわけです。そういうタレントは、殆ど二、三年で潰れてしまいますよ。これは間違ありませんね。

ところがタレントでも、先輩に対して礼儀を重んじる人も居ます。テレビ界という所は面白い所で、私は入つてまごついたんですけれども、どんなに遅くても「お早うございます」と言うんです。「今晚は」ではないんです。夜中でもお早うございます。ひっきりなしになつておりますから、常にお早うなんです。お早うございますと云つて先輩の所へ頭を下げに行く人、先輩に挨拶する人間、これは将来伸びる人です。

ところがそうではなくて、鼻もひっかけないというようなのは、一、二年はやるかも知れませんが、結局は没落するのが普通で、或いは麻薬に汚染されるとかというのが落ちですよ。

歌謡界に淡谷のり子という人が居りますが、皆さん方からいえば、大変なお婆さんです。彼女は七十幾つですから、東京音楽学校を出て、譜も読めるし、歌の素養というものはある人です。ああいう人が昔は歌を歌つておったわけです。今はブルースか何か歌つておりますが、そう上手ではないが、しかし生命は長いですよ。七十までとにかく歌つて、それで通用するんだから。これは素地があるからなんです。その淡谷のり子女史が、今の歌謡曲を歌っている連中は歌屋だということです。歌手ではなくて、歌屋だということをいうんですね。そうすると、いわゆるチンピラ歌手が、何よ、あのお婆ちゃん、と反撥するという風景がよくあるのですが、これは生意気になつている典型的な証拠ですよ。

まあ、仕事というものは、最初から高尚な仕事というものはあるわけではないのです。皆さんは大学で相当学問の奥義を究めていると思つているかもしれませんが、あなた方の勉強していることは、世間にはそのままは通用しないんです。これだけは、はっきりしています。ただし、学問の大事なことは、その基礎を作ること

が大事なんです。やったことが、明日からすぐ役に立つなんてことはありません。会社で要求していることは、そういうことではなくて、銀行へ入れれば、それは札束勘定からはじまるわけです。これが馬鹿馬鹿しいと思つたら、駄目ですよ。デパートへ入つたら、女のブローズとか靴下といった下着類を売られる。俺は大学を出て、おかしくてこんな物売れるかという者は、どこへ持つて行つても駄目なんです。デパートの或る社長が言つておりましたが、女子店員を募集し、一応試験をして、綺麗な一応の水準の人が入つて来る。これを食堂に廻すんだそうです。食堂の注文を取つたり、皿や井物を運ぶあれですね。あれにするのが一番よいそうです。あれに喜んで行く人は、どこへ持つて行つても使える。ところが、私は高校を出て、或は短大を出て、お皿運びなんかおかしくてやれますか、なんていうのは、どこへ行つても駄目。最初からネクタイ売場などへ行きたいなどと言うのは、碌な奴はいない。ネクタイ売場で、男に引つ掛けられるのが落ちだそうです。そしてそんな者はどうせ長らく勤める気はない。これはデパートの社長が言つているので、私が言つているではありません。そして食堂で一年間堪えられた人間は、お嫁さんになつても立派なお嫁さんになるといふんですね。それはそうですよ。人の嫌がる食べ、散らした皿を片付けるなんて

いう仕事は見たところ格好よくない、馬鹿馬鹿しいですよ。そういう仕事を喜んでやるかやらないか。皆さんも学校を出て、ネクタイを締めて高尚な仕事があると思つて行くと、とんでもないので、国鉄だつて最初は、水戸駅かどこかへ行つて切符切りからですよ。こんな切符が切れるかなんていうんでは、駄目なんです。

新聞記者だつて、最初は電話取りです。この電話取りが、なかなか難しい、なかなか相手のいうことが分からなくて、とんでもない原稿になつたりするんです。この間違つた例は、いくらでもあるんです。これは実際の話なんですけれども、日経は株式の担当部があるわけですが、取引所から電話が掛かつてきて、「今日は新日本製鉄の株が非常に上がった、これはご祝儀相場が上がった」。ご祝儀相場というのは、例えば日中国交が回復したというような場合、将来鉄鋼業界が大いに伸びるだろうというご祝儀で株が上がるわけです。これを「ご祝儀相場」といふのですが、「何で上がったんだ」と聞くと、「ご祝儀相場で上がりました」、それを聞いた記者は、「押し売り相場」と聞いたんですね。「押し売り相場で上がったんですね」と聞き返すと、「そうだ、ご祝儀相場だ」と。ご祝儀と押し売りが電話だと一緒になつてしまふんです。押し売りといっている奴は、押し売りですねと、ご祝儀といっている奴はそうだご祝儀だよと、そ

こで原稿に押し売り相場が出てくるわけです。とんでもないことで、押し売り相場なんていう言葉はないわけですけども、そのように電話一本取るのも難しいんです。電話取りなんかおかしくつてなどと思つておつたら、とんでもないことで、ではお前は何か出来るんだと言つたら、電話取り一本も出来ないんです。最近はその掛け方を知らない人が多いんですね。それがねえとか何とか言つて一時間くらい掛けている奴がいるが、ああいうのは電話の掛け方を知らない典型的な例です。電話なんていうものは、一時間もかけるものではない。あれで世間話をしてる奴がいるんだから。最近の若い者特に女性に多いですね。

まあ、それはともかくとして、仕事というのは馬鹿馬鹿しいと思つたらいかんです。それが大事なことで、大学を出てもイロハからやるんだ、と素直な気持ちで真面目にやらなければいけない。つまり生意気になつてはいけません。一年や二年たつて少し分かつてきて、こんなものは仕事に分かつたうちには入らない。よく十年選手といいますが、新聞社の場合でも、十五年たつてやっと原稿が書ける。火事原稿などなかなか書けないんです。どこどこに火事があった。それでは行つて来いといつてやると、「まだ燃えてます、まだ燃えてます」ばかりなんです。原稿はどうしたんだという、まだ燃

えてますと言ふんですね。鎮火したのは何時をもつて鎮火したというのがあるのですが、それを知らないで、燃えてます、燃えてますばかり言つて、なかには水を掛けてる奴が居るといふんですね。そういうふうに冷静に仕事が出来ようになるには、十年はかかるということですよ。これは何も新聞記者ばかりではなく、どんな仕事でもみなそうだと思います。要するに、生意気になつてはいけませんということですよ。謙虚な気持ちでやらなければいけないということですよ。

第五 本を読みなさい

時間もなくなつて来ましたので、最後に、本を読みなさい、ということですよ。これは皆さんはやっておられることと思うのですが、今はテレビ時代です。自分の仕事上テレビの統計をとると、主婦は四時間テレビを見ているんですね。新聞は十分しか読まない、まして本なんか読まないですよ。私はこれから本を読むということが皆さんにお奨めします。これは実話ですが、ご存じかどうか知りませんが、昔、木々高太郎(きぎ たかたろう)という人が居た。林麟(はやし たかし)とも言いましたけれども、慶応大学の医学部を出たお医者さんです。人生二回結婚論とか言つて話題をまいて、最後には非常に若い奥さんをもつたという人ですけれども

も、その人が洋裁学校で先生をしておった。花嫁学校ですね。毎年千人くらい卒業生があるんです。そこで林先生が行って、「皆さんおめでとう。ここを卒業すると、皆さんはお嫁さんに行く人もいらつしやることでしょう。ここには同窓会があるんだそうで、今年出た人はまた来年の同窓会でお会いしましょう。その時にはもうお子さんを抱いていらつしやる方もあるでしょう。但し一つだけ約束がある。この約束を守ってくださいませか」と言ったら、千人ぐらいた若い花のような女性がどおっと笑った。「一つだけ約束をするということは、一冊の本を読んでほしい。しかし週刊誌ではありません。最近週刊誌を本だと思っている人が随分いるようですが、あれは読書のうちに入らないから念のために申しあげておきますが、とにかく一冊の本を読んで下さい。その一冊の本というのは、一冊のまとまったものなら内容は何でもよろしい。例えば子供を大事にする育児の本、或いは料理の本でもよい、或いは文学でも歴史でも哲学でも何でもよい。まとまった一冊だけ読んで下さい、それを約束して下さい、この約束が出来ますか」と言ったら、皆どろろと笑った。「それは結構です、では約束ですよ」と言った。一年経って「皆さん、一年前に私が本を一冊読んでくれと言ったことを覚えていますか、読んだ方は手を上げて下さい」と言いますと誰も手

を上げなかった。一人として手が上がらなかつたということなんです。私はそれは事実だろうと思うんです。何も花嫁学校の人だけではない。社会に出た人で一冊の本も読まないという人が、ザラなんです。私の見た所でも、一冊の本も読まない人はたくさん居るのです。

皆さん方は学生だから本を読んでいるものと思いますが、社会へ出たら本を読まないことは必至です。絶対に読まない。絶対に読まないというとかか自慢しているようだけれども、読まなくなるんです。仕事が忙しいとか何とかいって、自分のやっている仕事の専門書すら一冊も読まない人が多いんです。大半が読んでいない。そういう現実を胸に手を当ててお互いに考えなければいけない。本を読むということは、自分の知的活動を積極化するということです。ですから本を読むということが、これからの時代にぜひ必要です。しかも人の上に立ってリーダーシップを発揮しようとする人、或いは人より抜きん出ようという人ならば、本を読まなければいけない。テレビを見るのはちよつと自分の仕事に関係しますから、テレビを見てもよいから本を読みなさい。特に12チャンネルをご覧なさい。それはともかくとして、本は読んで欲しい。

私は前からよく言うのですが、大学に四年間居たら、本は一千冊ぐらい持っていなければい

かんというんです。それは、文庫本を含めて特に古典を読みなさい。古典などというのは、社会に出たら絶対に読めないから。『戦争と平和』とか、或いは『カラマゾフの兄弟』でも、何でもよいですよ。皆さんはそういうものを読んだかどうか知らないが、私が慶応の時に塾長は有名な小泉信三という人で、僕らは社会思想史を習ったのですが、ある時、教室で「皆さんはドストエフスキイのものとかが、トルストイのものとか、そういう古典を読んで欲しい。そしてこの中で『カラマゾフの兄弟』を読んだ人が居りますか。居たら手を上げて下さい」と言われた。慶応の三年の時です。先ずパラパラと手が上がった程度で、殆ど読んでいないですね。私は学生時代は遊ぶことも大事だけれども、そういうものを身につけて、社会に出ても一冊くらいは本を読んで欲しいということなんです。皆さん笑っておりますが、皆さんもそうなんです。本を読むということは、非常に大事なことであります。

私ども大学の時に夏休みというのがありまして、今でもあるでしょうが、二か月ほどの間に五百冊の本を読めといわれた。私ども真剣になつて、意地でも読んでやろうと思つてやったことがあつたけれども、これはなかなか読めません。一日に十冊読むわけですからね。これはなかなか読めるものではありません。大学四年

間に一千冊の本を読んだとして、一冊平均五百円として五十万円です。皆さん恐らく自動車を持っておるのではないかと思うのですが、自動車が買えて本が買えないということはないと思うんですね。自動車も大事かも知れませんが、本も大事なんです。私はぜひ本を読めということをお願いしたい。社会に出た時、ああどこかのテレビの社長が本を読めということをやったと思う出すことがありますよ。今は読んでおられると思うけれども、今でも読んでいない人があるかも知れませんが、学校の教科書も読まない人が多いんだから。そういうことではやはり困るんですね。

この頃の小説家でも芥川賞とかいつておりますけれども、随分レベルが落ちたんじゃないかと私は思うんですね。私は時間の浪費だと思っから読んだことはありませんけれども、恐らく原書でフランス文学など読んでいる小説家などいないんじゃないでしょうか。アナトール・フランスとか、ああいうのをね、原書で読んでいる小説家は居ないのではないかと思う。それも時間がないから読めないのではなくて、知識がなくて読めないのではないかと思う。昔はみんな原書で読んだわけですよ。そんなのが文学者としてやっているのだから、推して知るべしですよ。そういうことを私は非常に感じるんです。どうか皆さん方は、非常に失礼な言い

方になって恐縮ですけれども、とにかく社会に出る場合には本を読むような、がっしりした頭脳を持った人間になっていただきたいということ、私は言っているわけなんです。

これからの社会はこれら五徳兼備の人間を求めている

話が散漫になりました失礼なことを申しあげたわけですが、仕事は総てである」ということ。「仕事は自分で選びなさい」ということ。それから「人に頼るな」ということ。「生意気になるな」ということ。それから「本を読みなさい」ということ。こういう人間を社会は求めているのです。社会に出てつくづく感じますことは、人間が大事であるということです。自分も経営者のはしくれとして、今テレビ屋の経営をやっておりますけれども、これは社長とか何とかでなくて、従業員全部を含めてよい人間が居るかどうかということによって、会社、企業の命運が決まるんです。もつと言うならば、国というものは、国の消長は人に在り、ということ、私は痛感するわけです。人材というものは、人間というものが如何に大切であるか、特にこの点を申しあげて、非常に失礼に亘ったかも知れませんが、社会はこういう人間を求めている、また社会に処して行くためにはそうしなければいけない、という原点を申しあげ

たわけです。誠に話は下手だし、失礼なことを申しあげたと思うのですが、これも商売がらに免じてお許し願えれば幸いです。

最後に、皆様方がこの和敬塾で生活を共にされて、将来有為な優秀な青年として日本を背負って二十一世紀まで引つ張って、立派な国にしてもらいたいということをお願いしまして、私の話を終わらせて頂きたいと思っております。どうもご清聴有難うございました。(拍手)

(文責在記者)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。